

大坂城の 櫓

やぐら

重要文化財

内部特別公開

日本の城の最高峰～大坂城の魅力に迫る

た もん やぐら せん がん やぐら えん しょう ぐら

多聞櫓・千貫櫓・焰硝蔵

おお て ぐち た もんやぐら

大手口多聞櫓

■大手口多聞櫓の歴史

寛永5年(1628)徳川幕府による大坂城再築工事によって建造されましたが、天明3年(1783)に落雷のため焼失。その後しばらく石垣だけの状態が続き、幕末に行われた大坂城総修復工事によって嘉永元年(1848)に再建されました。

再建にあたって幕府は、大坂・堺・兵庫・西宮のおもだった町人に多額の御用金を課しています。

幕末の動乱の中、大坂城を拠点とした14代将軍家茂や15代将軍慶喜もここを通過して本丸へと向かいました。特に家茂はしばしば城内諸施設の巡視を行い、この多聞櫓や千貫櫓の中にも足を踏み入れています。

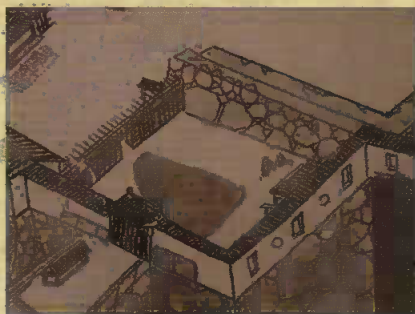
明治維新の大火や第2次大戦(太平洋戦争)の空襲にも奇跡的に焼失をまぬがれたこの多聞櫓は、高さが14.7メートルあり、各地に現存する同種の櫓の中では最大の規模を誇っています。

なお、豊臣時代の大坂城にもこの付近に大手口がありましたが、そこに多聞櫓があったかどうかはわかりません。

■構造と防御機能

大手口枳形の石垣上に建ち、大手門を越えて侵入した敵を迎えうつ役割を果たしました。枳形の北、下に櫓門(大手口大門)を有する渡櫓と、その東につながる続櫓とからなっていますが、枳形の南にあった「市多聞」とよばれる建物は現存していません。

渡櫓内部は4室からなっています。中央は約70畳敷(ただしこの部屋での1畳



多聞櫓再建前の大手口枳形
(浪華城全図より)



市多聞の礎石

は98.5センチ×210.6センチ)の広さを持ち、南端には櫓門を通る敵を攻撃する「槍落とし」の装置を備えています。続櫓は西に武者走り(廊下)、東に9畳・9畳・12畳・9畳・15畳・12畳と6室の部屋があり(ただしこの部屋での1畳は98.5センチ×192センチ)、銃眼を備えた笠石が西側に17並んでいます。

櫓門の総鉄張の扉、槍落とし、枳形内部に向けられた銃眼など、大手口を守る様々な工夫がこらされており、また外観から想像される以上に内部が広く、兵士が多数駐屯できるようになっています。

■大坂城に「多聞櫓」はたくさんあった？

「多聞(多門)」とは石垣の上に作られた長屋のことで、城壁としての機能と、兵士が詰めたり武器を納めたりすることのできる蔵・櫓としての機能の両方をかね備えていました。江戸時代の絵図を見ると、大手口枳形だけでなく、京橋口枳形・玉造口枳形・桜門枳形・山里丸枳形にも「多聞」とあることから、大坂城にはたくさんの多聞櫓があったことになります。また、本丸を囲む石垣上の堀も実際は長屋になっていて、これも「多聞」と呼ばれていました。



戦前の京橋門と京橋口多聞櫓

名称は、戦国武将の松永久秀(1510～77)が大和国多聞城(現在の奈良市内)で初めてあみだした形式であることに由来するといわれています。この城を訪れた宣教師が、城内に多数の塔や堡壘、倉庫を付属していた家が立ち並んでいる様子を報告していることから、現在の多聞櫓に近い形式だったことが想像されます。

せん がんやぐら 千貫櫓

■現在の千貫櫓はいつ作られたか

昭和34年(1959)4月より同36年9月にかけて行われた解体修理の時、土台付近の木材に墨で「御はしら立／元和六年／九月十三日」と書かれていることがわかり、柱立て式の日が元和6年(1620)9月13日だったことが判明しました。これは徳川幕府による大坂城再築工事の最初の年にあたります。



千貫櫓の部材に残されていた墨書銘

大坂城再築工事は大坂夏の陣で大坂城が落城してから5年後の元和6年から始められました。前年に大坂を幕府直轄地とした当時の将軍徳川秀忠は、来るべき大坂築城工事にもなう石垣築造への動員を西国・北国諸大名に命じ、翌元和6年3月1日に石垣築造が始められています。櫓や塀などの建造物工事は石垣や堀の築造が進んでいた7月以降で、この時、茶人としても有名な小堀遠州(政一)が奉行に命じられています。

■位置と構造



千貫櫓の窓から大手口土橋をのぞむ

大手口を北側から守る隅櫓で、西・南側は西外堀に面しています。石落としは南面と西面に各1つ、入口は東面と北面に各1つ、窓や銃眼はいずれも外側(南面・西面)にあります。

内部は1階・2階とも内室と周囲の武者走り(廊下)とからなり、2階武者走りの南には荷揚げ装置がありま

すが、これは明治以降に作られた可能性もあります。

二の丸の櫓としては伏見櫓(第2次大戦の空襲により焼失)に次ぐ規模をもち、構造はかつて乾櫓との間にあったひつじきやぐら坤櫓(第2次大戦の空襲により焼失)とほぼ同じです。ただし、坤櫓にはない唐破風があり、この櫓の格式の高さをあらわしています。



空襲で焼失した坤櫓



千貫櫓の唐破風

■重要拠点だった千貫櫓

千貫櫓の歴史は、豊臣時代、さらにそれ以前この地にあった本願寺(石山本願寺)の時代にまでさかのぼります。本願寺と織田信長との間で戦われた石山合戦の時、この櫓を攻めあぐねていた信長軍が「銭千貫文を出してでも奪いたい櫓だ」と語り合ったと江戸時代の戦記『武功雑記』は伝えています。「千貫櫓」の名称はこれに由来するといわれます。

天正8年(1580)本願寺を下した信長は、のちの大坂城本丸にあたることを重臣の丹羽長秀に預け、千貫櫓を一族の織田信澄に預けました。2年後、本能寺の変が起こって信長が明智光秀によって殺害されると、丹羽長秀は、光秀への加担が疑われた織田信澄がこもる千貫櫓を攻撃しています(『細川忠興軍功記』)。このことは、秀吉築城以前の千貫櫓が、一軍の将の拠点となるだけの規模と重要性を持っていたことを示しています。

翌天正11年、秀吉は大坂を手に入れ、大坂城築城を開始しますが、この時も千貫櫓は築かれ、秀吉がここから馬揃を見たというエピソードが伝わっています(『常山紀談』)。

江戸時代、再び築かれた現存の千貫櫓は、大坂城守衛の最高責任者である大坂城代の管理下に置かれました。寛文2年(1662)から大坂城代をつとめた青山宗俊は、この櫓の中で夕涼みをしたり、配下の役人たちに料理を振る舞ったりしています。

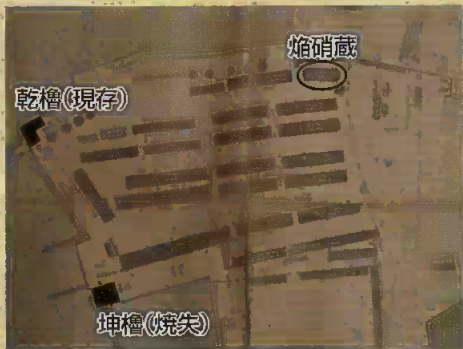
えんしょうぐら
焰硝蔵

■江戸幕府の火薬貯蔵庫

「焰硝」とは硝石を精製してつくった硝酸カリウムのことで、これに硫黄と木灰とを混ぜ合わせると黒色火薬ができあがります。焰硝とはあくまで火薬の原料なのですが、江戸時代には完成した火薬（合薬）をおさめた蔵のことを一般に焰硝蔵とよびました。

慶長^{けicho}20年(元和^{げんな}元年、1615)の大坂夏の陣で豊臣秀吉
築造の大坂城は落城し、現在の大坂城の遺構はすべて
徳川幕府の再築によるものです。城内には食料・燃料・
武器弾薬などをおさめる多くの蔵がありました。そ
れらは主に西の丸(現在の西の丸庭園の北半分)と御蔵^{おくくら}
曲輪(現在の大阪城ホール、太陽の広場付近)に集中し
ていました。いま残っているのは本丸の金蔵とこの焰
硝蔵^{せんざう}だけです。焰硝蔵は江戸城や二条城といった将軍
の城をはじめ各地の大名の城にもありましたが、江戸
時代のまま

残っているのはこの一棟のみです。壁・天井・床の全てを石造りとした構造も他に全く例がありません。



西の丸の蔵と焰硝蔵の位置

創建年代

は、大坂城代をつとめた常陸国土浦藩主土屋家の史料により、貞享2年(1685)であることが判明しています(内田九州男「西の丸塼硝蔵の建設年代」)。現状の面積は約171.9平方メートル、高さは約5.4メートル、内側貯蔵部は縦約15.8メートル、横が約2.7メートル、壁の厚さは約2.4メートルです。昭和34年に解体修理工事(屋根のみ)が行われ現在に至っています。

■石造りの焰硝蔵が作られるまで

この焰硝蔵が造られる前、大坂城にはどのような焰硝蔵があったのでしょうか。

幕府による大坂城再築工事が完了した寛永 6 年 (1629) のころには、本丸北西および二の丸東の 2 か所の帯曲輪にあったと考えられますが、17 世紀中ごろに作られた「大坂御城図」(国立国会図書館蔵)によると、二の丸北の金奉行元屋敷にもありました。その後さらに青屋口枳形内にも造られましたが、ここには万治 3 年 (1660) に落雷があり、大爆発を起こしてしまいました。その 25 年後、現在の焰硝蔵が新築される時には二の丸東帯曲輪と金奉行元屋敷の 2 か所に焰硝蔵がありました。

それまでの焰硝蔵は半地下式の「^{うけみど}埋土蔵^{ぞう}」でした。引火防止が目的ですが、火薬が湿りやすく部材も短期間で腐ってしまうため、貞享2年新築の焰硝蔵では総石

造としたのです。

なお6年後の元禄4年(1691)、幕府は「西ノ御丸焰硝蔵」すなわちこの焰硝蔵を建て直しています。詳細は不明ですが、貞享2年に造られた半地下式のを、元禄4年に現在の状態に改築したのかもしれませんが。

二の丸東帯曲輪の焰硝蔵はのちに姿を消し、伏見櫓内側の焰硝蔵は石造りに改築されています。これは明治維新以後もあったようですが、現在は残っていません。



金奉行元屋敷の焰硝蔵遺構
(明治時代の地図より)

■大坂城内外の備蓄火薬

大坂城に備蓄されていた火薬の量について、18世紀中ごろ以降につくられた、城内に勤務する役人のマニュアルというべき『浪華秘要録』という記録に、合薬2万3721貫270匁（約90トン）とあります。万治3年に青屋口の焰硝蔵が爆発した際の火薬の量は約2万2千貫（約82トン）でした。そのほか享保3年（1718）に6万1050貫目（約230トン）あったという幕末の記録もあります。

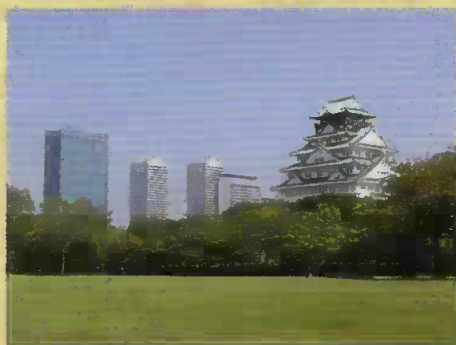
これらは、現存の焰硝蔵と金奉行元屋敷の焰硝蔵の2か所に納められていましたが、享保18年、2000貫(約7.5トン)を残して摂津国豊島郡長興寺村(豊中市服部緑地公園内)に新たに作られた焰硝蔵に移されました。長興寺村の焰硝蔵は明治維新の時に焼失したため現存していません。



長興寺村焰硝蔵の跡

西の丸庭園

大坂城公園の内、三の丸の西側に位置する有料エリアが西の丸庭園です。広大な芝生が特徴で、また園内には多くの桜の木が植えられ、春は花見客でにぎわいます。豊臣時代、西の丸は本丸に次いで重要な場所とされ、秀吉が没すると正室の北政所（おね）が一時暮らし、彼女が京都に移ると同時に徳川家康が入って政務を取り仕切りました。関ヶ原合戦の時点では西軍総大将の毛利輝元が入るなど、西の丸は重要な政治の舞台になっています。



芝生の広がる西の丸庭園



A 家運をかけた石垣築造

千貫櫓から乾櫓に到る径路は、西外堀にそびえる石垣の内側にあたります。西外堀の石垣は大坂の陣終結5年後の元和6年(1620)、徳川幕府の命によって築られました。堀の外からよく目立つ石垣だったからでしょう、工事に動員された諸大名は、特に晴れがましい角の部分や広い範囲を割り当ててほしいと幕府上層部にさまざまな働きかけをしました。その結果福岡藩主黒田家は千貫櫓北の一帯を、小倉藩細川家は乾櫓付近の角を担当しています。



千貫櫓北、黒田長政が担当したあたりの石垣

B 痛恨！ 坤櫓の焼失

乾櫓の南の隅石垣上には、70年前まで「坤櫓」という二層の櫓が建っていました。規模や形は千貫櫓とほぼ同じで、棟の向きが千貫櫓は南北だったのに対し東西になっていたこと、千貫櫓にある唐破風がなかった点などが異なります。窓は外側に25ありました。明治維新の際の城内大火でも焼失せず、創建年代は千貫櫓や乾櫓と同じ元和6年(1620)にさかのぼる可能性もあった貴重な古建造物でしたが、昭和20年(1945)の空襲により焼失してしまいました。



終戦直後、櫓が焼失して間もない坤櫓跡

C 妻子も住んだ大坂城代屋敷

江戸時代、西の丸庭園の南半分の場所には、大坂城の守衛や直轄都市大坂の統治、幕府の西日本支配の指揮に携わった幕府の重職、大坂城代の屋敷（公邸）が置かれていました。規模は將軍滞在用の本丸御殿より小さいものの、本丸御殿にはない、妻子居住用の奥御殿を備えていました。將軍は妻子とともに大坂城に入ったことは一度もありませんでしたが、大坂城代には腰を据えて政務にあたるよう、家族連れで赴任することが認められていたからです。



大坂城代屋敷敷地内の井戸跡

D 伝説の石積み名人

乾櫓の東の石垣の角は終戦の年の空襲によって破壊され、戦後もしばらく放置されていました。堀の外側からよく見え、大坂城の荒廃を象徴する光景として新聞に取り上げられたこともあります。修理は昭和28年(1953)から翌年にかけて行われ、愛媛県在住の伝説的な石積み職人、菅能宇吉氏の指揮により見事な石垣がよみがえりました。戦争によって深刻な被害をこうむった大坂城は、先人の努力の積み重ねによって現在に至っているのです。



爆撃で吹き飛ばされた西外堀石垣